

物語のタペストリー

小田博志
(北海道大学)

南京事件をめぐって開催されてきた、このセミナーあるいは研究プロジェクトに私も加えていただいて2年目となる。ここでの私の主な役割は、科学研究費の成果取りまとめのために、質的研究方法を学んでいる者として貢献することのようだ。けれどもこれが一筋縄ではいかなくて、思い悩んでいる。ここでは研究成果取りまとめの方向性を、私なりに模索して考えたことを書き留めておきたい。望むらくは、研究をまとめていくプロセスとその成果たる出版物自体が、まずはさまざまな参加者間の、さらにはプロジェクト外部の人びとの間の対話を誘発し、平和を生み出す働きをすることである。そのような成果とはどのようなものか、皆さんも一緒に考えていただけたら幸いである。

「研究」か「運動」か、「アクションリサーチ（運動的研究）」か？

私たちが関わっているこのプロジェクトは、「研究」だろうか、「運動」だろうか、それとも両者の組み合わせだろうか。「研究」は問い（まだわからないこと）から始まる。一方、「運動」は答え（すでにわかったこと）を前提に進められる。ここに両者の違いがある。つまり運動は「結論先にありき」となる。両者を組み合わせることを「アクションリサーチ」と言うが、その利点は運動が陥るおそれのある偏りを、研究の視点から是正して、より現実に適応したものにしていくことにある。

研究の視点を取り入れるためには、運動が前提としていることを振り返り、問いなおす作業が必要だ。また、運動の現場とその前提にズレがないか点検する必要もある。一度立ち止まって、種々の前提や仮定がはたして妥当なものかどうか、そこに問題はないか、運動が本来目指しているもののために、これまでの実践の形態をどう修正すべきなのか——こうしたことを、時間を取って

検討することが、「アクションリサーチ」においては一般的に行なわれるべきであるし、私たちのプロジェクトにおいても必要だと考える。

このプロジェクトが目指すのは、日本と中国との間の「和解」（平和な関係を結びなおすこと）だと私は理解している。そのためのアプローチとして、HWH が用いられている。両者は目的と手段の関係にある。この HWH には、ボルカス氏自身も言っているように、いくつかの前提がある。それを私なりに言葉にすると、次の三つの仮説になろう。

- (1) 「トラウマ」仮説：歴史的暴力は「トラウマ」となる。
- (2) 「国民」仮説：その「トラウマ」は「国民」を単位として共有される。
- (3) 「世代間連鎖」仮説：その「トラウマ」は「国民」の間で、世代を越えて受け継がれる。

これらはいくまでも仮説である。現実ではない。仮説には現実に対する妥当性と共に、限界もある。それを一度研究の立場から冷静に再検討する時間が、運動をよりよいものに高めていくためにも必要だろう。

特に国民仮説に対し、私は疑問に感じている点があるので、今後の議論のためにも記しておきたい。この仮説を前提とすると、和解の当事者は「日本人」と「中国人」となる。けれどもそれぞれの国民はそれほど均質だろうか。南京のセミナーに集まった日中両国のメンバーは、互いにオープンな姿勢を共有していた。その点で同質のメンバーだったと言えるだろう。一方、日本人の中でも「右翼」と称される人々の中には、「中国人」の言うことをはなから信用せず、南京事件についても否定する者がいる。そのような人たちは、そもそも日中の「和解」が必要だと思っていないだろう。セミナーに集まった日中のメンバーには、「和解」が必要かと思えるほど、最初から互いを受け入れる用意があった。だがこのセミナーに出ることが本当に必要なはずの、歴史を否認する人たちは、そもそもこれに参加しないだろう。この逆説をどう考えるか？ひとつの「国民」の中に深刻な亀裂があり、その間での対話が求められるのではないか。さらには歴史問題に無関心な、おそらく多数の「国民」とどう関わればよいのか。国民仮説では、この亀裂が均されて、見えなくなってしまうと思う。そして歴史問題に積極的な関心のある一部の者だけの閉じた運動になるおそれがある。では、これを開くためにはどうすればよいのか。

国民の中での立場の違いをみると、直接の当事者（加害者と被害者）と、そうではない人との差も指摘できる。直接の当事者でない人びとがどれほど「代理」できるのだろうか。そのような謝罪や赦しはどこまで意味があるのだろうか。

それからボルカス氏のいう「和解の6つのステップ」ないし「謝罪の8つのステップ」に関しても、果たしてこれが「東アジア」の文脈において妥当性があるのかどうかを検証する必要があるだろう。そのための研究課題として、日本と中国で使われている「和解」や「謝罪」と関わるイデオロムや慣習、また、歴史的暴力に関する「和解」と「謝罪」の成功例と失敗例とを分析し、他地域の例と比較することが考えられる。

トップダウンか、ボトムアップか？

質的研究では通常、人びとが自然に活動している現場を調べ、そこからボトムアップ式に、研究成果を導き出してゆく。けれどもHWHはその前提と実施手順が予めかなり固まっておき、セミナーではそれがいわばトップダウン式に適用される。だから質的研究のアプローチ——特に私がなじんでいるエスノグラフィの方法論——をそのまま用いるのが難しい。参加者に自由に感想を書いてもらったり、インタビューをしたりすればよいだろうか。これまでの報告書にすでに感想文は掲載されていて、それはとても貴重な資料だ。しかし「感想文」ではHWHの枠組みから外れるものは出てきにくい。では、ボトムアップ式の和解研究をいかに行なうことができるだろうか。

大きい物語と小さい物語群

上で述べた仮説が組み合わさって、セミナーの場はひとつの物語（ないしドラマ）として構成される。そのプロット（筋書き）を単純化して表せば、「中国人と日本人の関係は、戦争のトラウマのために断絶している。そのトラウマをHWHの手法によって癒し、日中両国民は和解に近づいていく」となるだろうか。これを大きい物語と呼ぶならば、個々の参加者はさまざまな小さい物語群を生きていることになる。小さい物語は、大きい物語と重なり合う部分もあるだろうが、決してそれには還元し切れない。そしてそれらの小さい物語群は、

別々ではなくて、互いに関わりながら、物語の網の目を形成している。大きい物語からさしあたり離れ、個々の参加者が生きる多くの小さい物語とその結びつきに、焦点を当てるとどうだろうか。研究の世界でこれはナラティブ・アプローチの分野に位置づけられる (Bar-On 2006; 野口 2009)。ナラティブ研究では個人のライフストーリーに焦点が絞られることが多い。けれども歴史和解のように、個人と集団、そしてそれらの他者との関係性が問題になってくる場合、別の研究枠組みが必要になってくるだろう。ここではそれを「物語のタペストリー (tapestry of narratives)」を比喩に考えてみたい。

物語のタペストリー

平和は普通「戦争がない状態」として定義されることが多い。しかし私は平和をするもの (doing peace) と捉えている。つまり平和を、人と人とが出会い、理解しあい、関係を結びあう絶え間ない実践と考えるのである。またここで和解とは、いったん分断された人びとが、その関係を修復することと言えるだろう。つまり平和とは関係論的 (relational) なカテゴリーである。「平和する (to do peace)」ために、つまり人と人とが結びつくために、その媒介となるものを私は「平和資源 (peace resources)」と呼んでいる。アウシュヴィッツ強制収容所跡の近くに建設された国際青少年交流センターという施設は、人びとが集い、自由に語り、耳を傾けあうことを可能にする平和資源だ。また4月28日の国際シンポジウムで公演された紫金草合唱団の皆さんの歌、そしてその歌の元となった紫金草という花も平和資源だ。日本と中国の参加者の間に立って、安心できる空間をつくりあげるボルカス氏のような人物もかけがえのない平和資源だ。

平和および和解を、人びとが関係を結び続ける実践として捉えたとき、ひとつの研究の方向性が見えてくるように思える。それは上で述べた小さな物語群と、そのつながりあい方、そしてそこで働く平和資源を明らかにすることである。私がドイツで歴史和解の課題に取り組む市民について調べていて驚嘆するのは、そのネットワークの広がりや層の厚さである。けれどもそれはもともと存在していたのではなくて、個別の人のイニシアティブがまずあって、それが他の人びとと響き合い、つながりあって、形を成していったものである。ドイ

ツの和解運動の成果は、大統領の謝罪演説のようなものというよりは、なににより人と人とのネットワークに表れている。東アジアでは、今のところヨーロッパほど密なネットワークはできていないようだし、それを課題として指摘できる。けれどもその動きはいたるところにある。まさにこの南京セミナーはひとつの重要な結節点だ。

私たちの「和解」を目指すセミナーの成果とはなんだろう。私は、セミナーを媒介にしてできた人と人とのつながりこそが、大切な成果なのだと思う。このセミナーにはすでに多くの人に関わっている。そこには多くの驚くべき偶然の出会いがあっただろう。南京のセミナーで、それぞれ異なった物語を生きてきた数十人が邂逅したことそのものが奇跡のように思える。この不思議なつながりを、漢字で「縁」という。「縁」への驚きの感覚は、日本人にも中国人にも共有できるのではないだろうか。

すべてのものごとは互いに関係しあう中で成立するという、関係論的な世界観を追及したのは、インドに発した大乘仏教の流れであった。それが純粹簡潔に表明されたのが有名な『般若心経』である。そのサンスクリット語原本は中国の僧玄奘によって漢訳され、日本には千四百年以上前に伝わり、以来日本の民衆の間にも広く浸透している。またそうした世界観を思想的に確立したのはインドの龍樹(ナーガールジュナ)である(中村 2002)。すべてのものごとは互いに依存しており、その関係性の中で共に生起しているありさまを、サンスクリット語では“*pratitya samutpada*”と言うが、これは「縁起」と漢訳された。英語では“*dependent co-origination*”のように訳される。また中村は「縁起」に“*relationality*”の訳語を与えている(中村 2002:165)。付け加えておくと、これは「東洋」にのみ独自の思想形態ではない。近年では、アメリカの社会心理学者ガーゲンが『関係論的存在 (Relational Being)』のような著作で、同様の思想を展開している(Gergen 2009)。上で平和とは関係論的なカテゴリーだと述べたが、それを研究する枠組みとして、このような関係論的な世界観が適しているのではないかと思われる。

セミナーやシンポジウムという催し物、南京事件という歴史的出来事、南京や京都という場所、そしていろいろな人物を介して、多くの人びとがつながり、平和へのひとつの動きが生み出されている。そこには夏淑琴さんのように南京

事件によるすさまじい心身の痛みを被った方がいる。南京の張先生やその学生たちがいる。兵士を祖父とする日本人学生がいる。国際シンポジウムに出演された紫金草合唱団の皆さんは、日本による加害の歴史を歌い継ぐ活動をされているが、その中には自身が空襲や満州引き揚げなど過酷な戦争体験をして、それが合唱活動の原動力となっている方もいる。このようにそれぞれが独自の顔と名前をもち、かけがえのない人生の物語を生きている。

私が村本さんのお名前をはじめて聞いたのは、ドイツのベルリンでのことだった。また紫金草合唱団の方と私がお会いしたのは、中国の撫順というところであった。このように個々人は不思議な「縁」によってつながりあっている。そしてそれぞれの物語が南京や京都で交差し、「物語のタペストリー」がまさに織り成されていっている。

この「物語のタペストリー」を、研究成果として提示できないものだろうか。それぞれの参加者が、自らの物語を、そして他の参加者との関わりを、そしてその結果浮びあがってきた国境や世代を越えた物語を語るのである。互いに関わりあいながら、つむぎ出されていく平和。それが「縁起」していく様を、ポリフォニック（多声的）に編み上げる。そんな研究成果とはどういうものだろうか？この物語のタペストリーは、平和が形成されていくプロセスを実証的に示す、貴重なケーススタディとなるだろう。

【参考文献】

Bar-On, Dan 2006 *Tell Your Life Story: Creating Dialogue among Jews and Germans, Israelis and Palestinians*. Central European University Press.

Gergen, Kenneth J. 2009 *Relational Being: Beyond Self and Community*. Oxford University Press.

中村元 2002 『龍樹』 講談社

野口裕二 2009 『ナラティブ・アプローチ』 勁草書房